

中国北方少数民族伝承文学概説（四）

——チベット族英雄叙事詩カサル王伝（一）——

高 橋 庸 一 郎

序にかえて

—説唱芸人玉梅女史との会見記—

(二)

(一)

ひと昔前なら、チベット人であれば誰でもカサル王伝を知っていたし、誰でもカサル王伝の2,3節ならふしを付けて歌い語る事が出来た。そして当時はまだチベット全土に何人かの優れたカサル王伝の説唱芸人が存在していたし、彼等の説唱を聞くと言うことがチベット人達の生きていく上での楽しみであり、また誇りでもあった。しかしここ10年以來事情が変わってきた。特に都市部を中心とした若者達の中には、カサル王とはいったい誰なのか、どんな人物なのかを知らないものも出てくるしまつである。それだけチベット地区にも中国沿海大都市の現代文明が急速に波の様に押し寄せてきて伝統的チベット文化を払拭しつつあると言うことなのであろう。あのフランスの優れたチベット文化研究者のスタイン（R.A.Stein）が比較的華々しい説唱人達の活躍に触れながら表した『チベット史詩と説唱芸人の研究』（*Recherches sur le Popée et le Barde au Tibet*）を世に出してからまだ40年も経っていないが、現在優れた説唱人は急速に減少し、ほんの十指で数えられるほどしかない。しかしそれでも尚やはり現代の多くのチベット人にとって、カサル王はチベット族の英雄であり、彼等の理想の人間像でありつづけていることにはかわりない。

ラサ市の西北郊外にある「チベット自治区社会科学院」の会議室で、カサル王伝説説唱芸人玉梅さんの朗々とした歌語りを聞かせていただいたのは今年（1998年）の8月17日のことであった。前日に此の科学院のチベット研究所副所長である陶長松先生に電話でお願いしたのは、当科学院のカサル王伝研究の現状をお聞かせ願いたいということのみであったのであるが、次の日実際に行ってみると、こちらとしては口には出せなかったがしかし玉梅さんにお会いしたいという非常に強い希望を先生が察せられて、玉梅さんを同席の上で我々2人（私と武漢大学で4年にわたって日本語の教鞭を執られていた前田芳一先生）を歓迎してくださったの

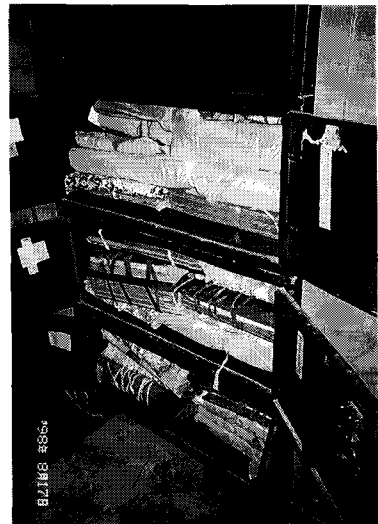


写真1 社会科学院の蔵書棚におさめられた「カサル王伝」関係の文献



写真2 ジュズを練る玉梅さんと(於 社会科学院会議室)

であった。私は玉梅さんにお会いしたその場で
すぐ「カサル王伝」の説唱を聞かせて頂きたい
とお願いした。しかし彼女は、今日は数珠を
持ってきていないので演唱は出来ないというこ
とであった。チベットの説唱芸人が説唱に当た
って、銅の鏡や帽子、楽器、お札のような物な
ど、その人独特の小道具を用意する事が多いと
いうことはよく知られていることなので、それ
も仕方のない事かと、一時は諦めたかけたので
あるが、しかしやはり諦めきれず、「何時まで
でもここで待たせていただくから、どうか其の
数珠を取りに帰ってきてほしい」と懇願して、
小半時後にやっと彼女の説唱を聞くことが出来
たのであった。

(三)

こうした彼女とのやりとりを通じて解ったこ
とは、彼女はほとんど漢語を解せない、つまり
漢語を読めないし、書けない、しゃべれないと
いうことである。そして短時間の接触で私が得
た感触では、彼女はひょっとしたら漢語は勿論
チベット語さえも、読み書きは出来ないのでは
ないかということである。ここに彼女の「神授
説唱芸人」としての宿命的神秘さの宿る因縁を
見たような気がしたのであった。この間彼女と
私の間に立ってきめ細かく仲介、通訳の労を執
ってくれたのが同社会科学院・民族研究所の副
所長であり、助理研究員でもある、次仁平措氏



写真3 チベット自治区社会科学院 カサル王伝研究 班のメンバーと

(チベット族)であった。氏は浅黒い顔に黒く
光る大きな目を持っていたいかにもチベット族ら
しい精悍な風貌の30代半ばの研究者であった。玉
梅さんの説唱の後、私の提出した質問に一つ一
つ丁寧に答えてくれたのも同氏である。

(四)

玉梅さんの説唱は約30分ほどつづいたが、最
初の10分ぐらいはリズムのある語りであるが、
あまり抑揚がなく、メロディー性がない。また
最後の5分間もおなじ様なリズムのある語りに
戻るのであるが、此の2つの語りに挟まれた部
分はオクターブの高い歌謡になっており、後の
次仁平措氏の説明によると、此の部分は対話で
あって、2人の異なった人間のやりとりがそれ
ぞれ異なったメロディーに依って表現されてい
るという事であった。此の時の説唱は勿論すべ
てチベット語であって、当然筆者はそれを理解
することは出来なかったのであるが、次仁平措
氏の説明ではラサ周辺に住むチベット人達も、
恐らく此の説唱を聞いてもあまり理解出来ない
であろうということであった。現代のチベット
語にはだいたい3つぐらいの方言があり、それ
はラサ(拉薩)語、アンド(安多)語、カン
(康)語なのであるが、玉梅さんの語りの言葉
はアンド語にラサ語の混じったものであると言
う。これは玉梅さんの生い立ちと遍歴からくる
ものであるらしい。チベット自治区は地理的に

は大きく6つに分かれている。最も北西部のアリ地区、其の東隣で、アリ地区とほぼおなじ広さを持つ那曲地区、其の南隣のラサ地区、更に其の南隣で、ネパール・ブータンと境を接しているシェガツツエ地区と山南地区、それとラサ、那曲との東隣で、四川省に接している昌都地区である。ラサ語はだいたいラサ、シェガツツエ、山南でしゃべられ、アンド語はアリ、那曲で、カン語は昌都地区方面の方言である。チベット自治区以外の青海省や甘粛省に住むチベット族は、だいたいアンド語をしゃべり、四川省西部、雲南省北西部に住むチベット族はカン語をしゃべるのが普通である。現在のチベット自治区のラサ以東で南寄りに位置するところ、及び四川省の西部で定康付近までを含む地域を解放以前は西康と呼んでいたのであるが、其の名残で現在の昌都地区や四川省西部をカンと今もいっているのである。

(五)

玉梅さんは北チベット、那曲地区那曲鎮から東へ230キロ、索県に近い寒村の出身である。楊恩洪の『民間詩神——カサル芸人研究』に依れば此のあたりには人々からカサルの馬の鞍と呼ばれている大岩、カサルが戦闘の時に用いた戦闘用の太鼓と鼓槌と言われている大岩群、或いは馬の鞍のある山の麓には、地面に深く穿たれた大きな穴があってこれはカサルの馬蹄の跡とされているなど、カサル故事に纏わる遺跡が多い。更に此のあたりには相向かい合って屹立している2つの、人間の形をした大きな岩があり、そのひとつはカサルでもう1つはカサルの最愛の妻チュムの化身で、2人はカサルが魔の国へ遠征に旅だったとき、ここで別れを惜しみあってその時の姿がそのまま遺ったものとされている。また付近を流れる溪流の傍らには広大な巨石群があり、これらは嘗てチュムが釜を置いて茶を沸かし、飯を作った竈の跡であるという伝説も今に伝えられており、「釜かけの場所」、「チュムの足跡」等という言

い方もあるという。またこれらのほかにも、カサルの耳といわれている山やカサルが7人の魔女と碁を打った碁盤の大石、カサルの計略によって、魔女が化した2つの鳥の形をした石、或いはカサルの弓と矢等などカサル伝説に関わる景物は枚挙にいとまがない。此の地に住む人々は、自分達が、嘗てカサルが生き戦い活躍した地に住んでいるということをこの上なく誇りにしているという。玉梅さんはこのような、極めて濃厚なカサルの環境の中で、つまりカサル王伝説の懐のまっただ中で生まれ育ったのである。

(六)

楊恩洪によれば玉梅さんの父親は名をラクタといった。彼はもともと索県のジャト村ジャブタン寺の僧侶であった。寺内の僧達の内でも最も踊りが得意で、寺の祭りの時には欠くことの出来ない人物であった。そして彼もカサル王伝の説唱をよくした。彼が何故此の説唱を善くなし得たのかはよく解らないが、彼の娘の玉梅さんもそうであった様に「神授説唱人」であったらしい。即ち彼が若い頃、ある日夢をみた後、ビル県パイガ寺の活仏に、説唱の智慧と知識の扉を開ききっかけを与えられて、それからカサル王伝の説唱をやるようになったというのである。ラクタは3ヶ月にもわたってカサル王伝のそれぞれの異なった故事を唱えつづける事ができたという。此のラクタが亡くなったのは1973年で、その時娘の玉梅さんは既に16歳になっていた。恐らく玉梅さんは16年間、父親の説唱を家庭の中で或いは村人達と一緒に村の広場や村長の家の広間などで聞きつづけて育ったのであろう。玉梅さんのいわゆる「神授」を解く鍵は此の点に求める以外ないであろう。

(七)

玉梅さんは1957年チベット暦の火鶏の歳に生まれたという。筆者があつた1998年、今年の8

月であるが、彼女は丁度41歳であった。堂々とした体軀、浅黒く日焼けした顔に、大きくて黒い目を持っていた。彼女は椅子にゆったりと座り、目を半眼に閉じ、手で説唱のリズムに合わせながら大きな数珠の玉を一つ一つ繰りつつ、澄んだ響きのある声で歌い語ってくれた。次仁措氏によれば、其の半眼に閉じた瞼の裏に、彼女が語る物語のすべてが映像となって映し出されていると言うことであった。彼女は16歳の時から説唱を始めたのであるが、其のきっかけについては神秘的な話が伝えられている。高寧に依れば彼女が友達と放牧に行き、措那（黒水湖）と措（白水湖）のそばに行ったとき丁度昼時で眠くなったのでその草地に寝ころんで眠ってしまった。その時に夢をみた。黒水湖の中から出てきた妖怪と白水湖の中から出てきた仙女が彼女を奪いあっていたのである。仙女は玉梅さんを指さして「この人は我々がカサルの人である。私はこの人に、カサルの英雄的全業績を一言半句漏らすことなくチベット全土の人々に教え伝えさせたいのだ。」と言ったという。玉梅さんは目ざめた後1ヶ月間大病して、床に伏したままご飯も食べず、話もせず、其の間四六時中目の前に見えるのはすべてカサルの事跡の物語であったという。その後絨布区ジャブタン寺の永貢活仏が家にやってきて念仏を唱えてお祈りをしてやると、45日して病気はすっかり好くなって起きあがれるようになり、それから説唱が出来るようになったというのである。また別の話によれば、玉梅さんは、草地で夢を見て、7日の大病の後突然説唱が出来るようになったという。ある時彼女は家族や近隣の人たちにカサル王の説唱を7日7夜聞かせつけ、口や舌・唇から血が唾となってほとばしり出るほどであったが、それでも尚彼女はカサル王伝を語りたいと言う衝動を押さえきれず、そのまま語りつづけたという。高寧は直接には玉梅さんにあったことはないようであるから、こうした話は、彼女のあまりの「神授」的神秘さに依って巷の人々の間にいつのまにか発生したもののなのであろう。那曲の索県にまでいって

実地に見聞し、玉梅さんに直接あつて調査した楊恩洪はさすがにそれ程野放図な逸話は述べてはいないが、しかし次のような話をかたっている。玉梅さんが16歳で不思議な夢をみた後、父親のラクタはわが身に何かが起こるであろうと言う予感を既に持っていた。ラクタは自分の娘の説唱に大いに満足を感じていた一方で、自分の此の世での時間がもう長くはないと感じ始めていた。彼は妻に「私の靈感はもうすべて娘にやってしまった、どうも私はそろそろ天に帰らねばならないようだ。」等とよくいうようになった。玉梅さんが夢をみた其の夏のある日村長が羊を1頭殺して、ラクタを家に招いてご馳走した。村長の家から帰った後、ラクタは腹の調子が良くないのを感じた。次の日の朝彼は妻にいった。「今日は玉梅を放牧に行かせないでくれぬか。あの娘に話して置きたいことが有るんだ。」妻はそんなに深く気に止めないで、「話したいことが有るなら、今夜にでも話したら」と答えて、玉梅さんをいつもと同じように放牧に行かせた。しかし図らずもその日、夕方玉梅さんが放牧から帰ってみると、父親はもう此の世の人ではなかったというのである。此の話も些か謎めいてはいるが、これもやはりラクタから玉梅さんへの「神授説唱芸人」としての継承の神秘を表したもののなのであろう。此の点について直接玉梅さんにただしてみたかったが、時間の制約もあったためにはばかれた。

(八)

玉梅さんが社会科学院の会議室で我々に演唱してくれたのは、カサル王伝の中の「絨嶺の戦い」と言う1章である。此の章はあまり知られていない章のようである。章の名前や其の内容はそれぞれの説唱人に依ってもことなるし、また伝承されている、それぞれの地方によっても其の呼び方や内容は違っている。また説唱を通じて伝承されてきた以外に、カサル王伝には多くの伝世の手抄本も存在しており、これらはすべて其の分章の上でも、或いはそれらの分

章の序列の上でも同一ではない。其の為に一概には言えないが、ここで今までに整理されてきた章の名前と順序を比較的前の方の部分だけを挙げてみるとつぎのようである。

1959年『文学評論』第6期 徐国

一、天嶺ト笠 二、英雄誕生 三、賽馬称王 四、迎娶珠牡 五、嶺と魔国 六、嶺と黄霍爾(上) 七、嶺と黄霍爾(下) 八、嶺と白霍爾(上) 九、嶺と白霍爾(下) 十、嶺と漢地 十一、嶺と姜国 十二、嶺と索布馬国(上) 十三、嶺と索布馬国(下) 以下略

1982年『「カサル王伝」研究述評』開頭山丹珠昂奔

一、天嶺ト笠 二、英雄誕生 三、賽馬称王 四、迎娶珠牡 五、十三軼事 六、北地降魔 七、霍嶺大戦(上) 八、霍嶺大戦(下) 九、嶺と松国 十、嶺と中華 十一、嶺と大食 十二、嶺と門域 十三、上索布馬国 以下略

1983年『中国少数民族文学』毛星

一、天嶺ト笠 二、英雄誕生 三、賽馬称王 四、降伏妖魔 五、霍嶺大戦 六、姜と嶺国 七、門嶺大戦 八、大食財宗 九、切松石宗 十、朱孤兵器宗 十一、英雄珍珠宗 十二、松嶺大戦 十三、梭波馬宗 以下略

1989年『藏族文学史』藏族文学史編写組

一、仙界遣使 二、英雄誕生 三、十三軼事 四、西寧馬宗 六、世界公桑 七、魔嶺大戦 八、霍嶺大戦 九、姜嶺大戦 十、門嶺大戦 十一、大食財宗 十二、蒙古馬宗 十三、蒙古鎧甲宗 以下略

1991年『藏族文学研究』錦華

一、天嶺ト笠 二、英雄誕生 三、十三軼事 四、賽馬称王 五、降伏魔国 六、霍と嶺国の戦い(上・下) 七、嶺と姜国 八、嶺と門域 九、大食牛国 十、契玉国 十一、向雄珍珠国 十二、朱古兵器国 十三、松嶺大戦 以下略

こうしてみると上に述べた如く編集者によっ

て名前や順序にかなりの出入りがあることが解るが、しかしまたそれなりにかなりはっきりした共通部分があることも事実である。次に玉梅さんの説唱の目録を掲げてみると、

1959年『民間詩神——カサル芸人研究』楊恩洪

一、天嶺ト笠 二、誕生編 三、噶嶺の戦い 四、嘉嶺の戦い 五、絨嶺の戦い 六、丹瑪乃宗 七、嘎提大鵬宗 八、降伏魔王魯賛 九、降伏霍爾白帳王 十、降伏姜国薩当王 十一、降伏門国辛赤王 十二、大食財宗 十三、歇日珊瑚宗

絨嶺の戦い第5番目にあるが、これはそれまでの目録には全く出てこなかったものである。管見では此の章の漢訳はまだ出ていないようなので其の内容は解らないが、恐らく此の章は玉梅さんだけの持ち章なのではあるまいか。

(九)

1人の説唱芸人が全生涯に説唱出来る部・章の数と其の内容が、その人が説唱始めた若い頃から、晩年になるまで変わらないと言うことは先ずない。一般には歳を経るにしたがって、其の数も増え、内容も豊かになっていくものであるという。玉梅さんの場合も、索県の田舎からラサと言う都会に出てきたことや、文化大革命と言ったような大きな心の変動を経験したこと、またラサの大きな会場で大勢の聴衆を目の前に説唱したこと等を契機として、何らかの変化があったであろうと言うことを問題として取り上げている研究者もいるくらいである。玉梅さんの場合も、最初説唱可能な部数は20数部と言われていたのが、後には40数部となり、今では玉梅さんの説唱出来るのは70数部であるといわれている。そして最初の頃の目録は、美嶺大戦、門嶺大戦、太嶺楚央郎巴、雍卡薪宗、薪卡葉宗、水神査宗、郭卡葉宗、誕生嶺記、阿塞鎧甲案、庭赤帽宗、白嶺血宗、雪神楚古央娘宗、巴嶺毒宗、大神黄金宗、西南羅利花宗、達絨水晶宗、其嶺寸央宗、阿里仁宗、年絨水嶺

王大戦夏宗降伏伝、夾嶺夾察誕生記、栄嶺栄察誕生記、郭嶺久栄誕生記、等で此の中には上・下に分かれるものもあって、全部で28部とされている。これらの中には先に挙げた多くのものがない、ここに無いものは玉梅さんが恐らく後になって得たものであろう。しかしそれらを文盲の身にして如何に修得し得たかはさだかでない。ただ先に言う所の、「説唱出来るのは20数部」と言い「40数部」と言いまた「70数部」というのは確かに説唱出来るものであって、既に録音なり、録画なり、或いは文字として記録したものである。玉梅さんの言を借りるまでもなく、1部1章でさえ全部を説唱する事は非常につかれることである。玉梅さんと同郷でありまた彼女のかかなり近い縁者でやはり説唱芸人でもある曲扎は、「阿里黄金宗」と言う1部を筆記するのに原稿用紙約500枚を要したと言う。また「巴傑盤甲宗」には原稿用紙1000枚、「亭遅墨宗」には700枚、「卡容金子宗」には、上・下それぞれ700枚、「阿吉綿羊宗」は500枚、「斯哇玉宗」は900枚が当てられたとされている。1部平均700枚としても其の全体の量となると大変なものである。節を付けずにただ声を出して読むだけであっても原稿用紙700枚では恐らく最低10時間にかかるであろう。このあいだの疲れによる休憩時間等も考えれば、其の時間はもっとながくなる。10部20部と一口に言っても其の説唱・記録となると容易ではない。例えば70数部の作品を一生涯の内に果たしてすべて説唱・記録出来るであろうか、はなはだところもとない。現に歴史的にも最も優れた説唱芸人チャパ老人の場合は100部以上説唱出来るところが生前に記録できたのは30数部にすぎない。

(十)

玉梅さんは「神授説唱芸人」と言われている。次仁平措氏によると説唱芸人には大きく分けて神授説唱芸人 銅鏡説唱芸人 講書説唱芸人の3種類あるという。

神授説唱芸人は托夢説唱芸人とも呼ばれる如く、些か神秘的なベールを纏った謎めいた存在である。玉梅さんを始め、チャパ老人、青海省唐古拉の才讓旺堆などとりわけ秀でた説唱人とされる人々の多くは此の部類に属している。若いとき何等かの理由によって大病し、生死の間をさまよっている間に、カサル王の事跡に関わる夢、幻覚をみて、病が癒えた後カサル王伝の説唱を突然始める様になったのである。しかも彼等は、語り初めの当初から数十部の物語をよどみなく何時間でも何日間でも語りつづける事が出来るのである。そして玉梅さんもそうであるが彼等はほとんど教育を受けたことが無く文盲である場合がおおい。此の神授説唱人の不可思議さについては中国内の研究者達が各方面から取り上げて論じているがまだまだ調査解明されねばならない点が多くある。しかしカサル芸人についての研究者である高寧は、彼等の夢・病・突然・長大なカサル故事・説唱等の結びつきについて、ある程度の超通常の霊感的作用を認めながらも、彼等が生まれ育った幼児少年若年時代のカサル説唱の世界と環境は共通しているとして、其の人並み優れた感受性と記憶力に主要な原因があると結論づけている。確かに世界的な視野に立つてみればこうした現象は、歴史的な伝承者や語り部には共通するものであろう。『イリアス』『オデッセイア』の伝承者であるギリシャのホメーロス、『古事記』を誦習したという日本の稗田阿礼、平曲を演唱した琵琶法師等も、環境、時代、現象上の差違や其の程度上の違いはあっても、共通する点も恐らく多いに違いないから、チベットの此の神授説唱人についてだけをあまり特殊視しすぎないほうがいいかもしれない。

銅鏡説唱芸人というのは、次仁平措氏によれば説唱に当たって銅のかがみを側に置いて、其の鏡をみながら、自分はカサル王について何も知らない、故に此の鏡に映るカサル王の華々しい活躍の姿を逐いながら、それを皆様方に語りお聞かせするだけである、と言うような前口上を述べて語り出すのである。ただ説唱人

によっては語りの前に鏡に向かって大仰な拝礼の儀式めいたことをするものもいるということである。内蒙古の藏族文化研究者である降辺嘉は此の銅鏡説唱人を円光芸人とよび、ボン教の神官が神降ろしや占いの時にするやり方を採用したのであるとのべ、チベット・チャムド地区のカサチャバがもっとも有名な円光芸人であるとしている。此の類に属する芸人は歴史的にも少ないらしく、其の事跡はあまり定かでない。

講書説唱芸人というのは、カサル王伝の事跡を記した書をみながら説唱する芸人で、ごく普通の説唱芸人である。ここ数年の間にチベット族居住地区で多くのカサル王伝の手抄本やチベット式の版本が発見されている。恐らく其の内の多くはこれら講書説唱芸人のテキストであったであろう。ただこの種の芸人の中にはひらひらとした何枚かのメモ書き程度の紙片を手にしているだけで何時間にも亘る説唱をこなすものもいる。その中には神授の人もある事もあるが、だいたい長年の経歴からの暗唱によるものである。この講書芸人は最近までラサの街角で見かけることが出来たと言うひともある。今ラサのみやげ物店で売っているカサル王伝のカセットテープはこうした講書芸人による録音である。

降辺嘉は以上のはかに 頓悟芸人、聞知芸人、蔵宝芸人、掘蔵芸人等細かく分類しているが、頓悟芸人というのは、これも些か謎めいているが、ある一定期間だけ悟りを開いた様にカ

サル王伝を1部か2部だけ、或いある一定の短い時間だけ説唱し、其の一定の期間が過ぎてしまうと、人がまるで換わってしまったかのように、全く説唱する事が出来なくなると言うのである。神授説唱芸人よりこちらの方が一層神秘的で不可思議といえるかもしれない。

玉梅さんはまだ若くて今年41歳である。現在はチベット自治区社会科学院のカサル王伝研究班の正式なメンバーの一人として、日夜説唱に励んで、それが日々録音され記録されている。これから更に大きな成果が期待される。

(十一) (補)

地図でみるとラサの中心部に近い街中にカサル王の廟がある。いつ頃からあるのかは解らないが、あたりでその場所をきいても知っている人はほとんどいなかった。この廟はとても小さく、見学やお参りに訪れる人もほとんどいないようである。廟には若い僧侶が1人いるだけで、其の僧もこの廟の歴史については何も知らないようであった。中には釈迦牟尼、蓮華生、観音等の像はあるが、カサル王の像はない。ただ片隅に観音開きの蔵書棚があつてそこにはチベット式版本の書籍がぎっしりと詰まっていた。そこの若い僧に聞くとそれらの書はほとんどがラマ教の経典と言うことであったが、カサル王伝の版本もあると言うことであった。そこで其の版本を探し出して、写真を撮らせても



写真4 ラサ市内にあるカサル王廟の案内板

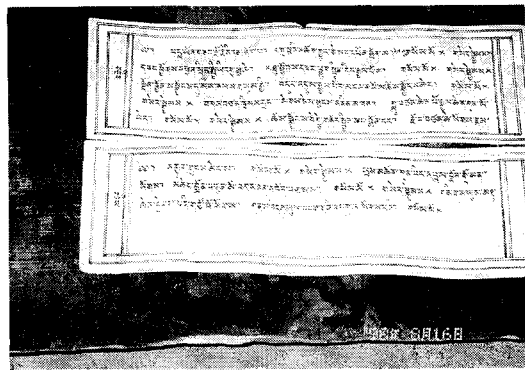


写真5 カサル王廟内に保管されていたカサル王伝の版本



写真6 カサル王廟の内部と若い僧侶



写真7 カサル王廟内の書籍保管棚とギッシリつまった書籍

らった。この廟にはほかに清朝・乾隆時代の碑文等があったりなかなか歴史を感じさせる趣であったが、財政的に恵まれていないせいか、かなり荒れていた。其の若い僧の言うことには、数年後にはこの廟をなんとかもっと充実させて、ラサ市におけるカサル王事跡の名所にしたいということであった。

参考文献

- 楊恩洪『民間詩神—カサル芸人研究』中国蔵学出版社，1995年。
- 降辺嘉『カサルと藏族文化』内蒙古大学出版社，1994年。
- 高寧「カサル芸人『神授』の謎」『西藏研究』1997年第四期。
- 李佳俊『文学・民族の形象』西藏人民出版社，1989年。

- 錦華『藏族文学研究』中国蔵学出版社，1992年。
- 毛星『通極少数民族文学』湖南人民出版社，1983年。
- 錦華『藏族民間文学』西藏人民出版社，1991年。
- 藏族文学史編写組『藏族文学史』四川民族出版社，1989年。
- 趙秉理『カサル学集成』甘肅民族出版社，1990年。
- 降辺加措編『カサル王伝研究文集』四川民族出版社，1986年。
- スタイン『西藏史詩と説唱芸人の研究』西藏人民出版社，1993年。

〔付 記〕

本稿は1998年度阪南大学産業経済研究所助成研究「チベット地区・四川省・雲南省に於ける『カサル王伝説』の口承伝承の範囲と内容の分岐変化の研究」の成果報告の一部である。

(1998年10月16日受理)